

## 国際赤十字・赤新月社連盟 バングラデシュ南部避難民救援事業（フィンランド赤十字社 フィールドホスピタル支援）

### バングラデシュ南部避難民保健医療支援事業

大阪赤十字病院 麻酔科・集中治療部 佐藤聖子  
（派遣期間: 2018年12月4日～2019年1月28日）

#### 概要

2017年8月にミャンマーのラカイン州で発生した暴力行為により、隣国バングラデシュ南部に90万を超える避難民が流入し、緊急人道支援が必要とされました。国際赤十字・赤新月社連盟（連盟）は現地のバングラデシュ赤新月社を中心に、連盟と各国赤十字・赤新月社25社が協力し、緊急援助を届けてきました。私が活動したフィールドホスピタルは、避難民キャンプで24時間対応で救急患者を受け入れ、外科手術のできる救急病院として機能している数少ない医療施設のひとつです。

私は麻酔科医師として12月6日から12月26日までこのフィールドホスピタルで活動しました。

また、日本赤十字社（日赤）は連盟の要請に基づき、2017年9月に基礎保健ERUを出動させ、以来120人以上の職員を派遣してきましたが、避難民問題の長期化を受け、2018年5月より避難民および地元コミュニティーを対象とした中長期的な支援形態への移行を開始しました。その内容は「直接的な医療支援」から、バングラデシュ赤新月社が主体となる「予防と治療」を軸とした中長期の保健医療支援に重点を移すものです。

具体的には診療所の運営・管理と地域保健活動（疾病予防などの保健教育）の二つに大きく分けられ、私は主に診療所の運営管理に携わりました。

#### フィールドホスピタル

フィンランド赤十字社が母体となって2017年10月から運営開始した、24時間外科手術対応可能なキャンプ内の病院です。北欧からの派遣者が大多数を占めていましたが、それに加えてカナダ、ニュージーランド、フランス、台湾などからの派遣者も含めた多国籍のチームでした。

外科チームの内訳は、外科医2名、産婦人科医1名、麻酔科医2名、麻酔科看護師2名、手術室看護師3名が基本で、状況に応じて増減があります。

そのほかには看護師、助産師、薬剤師、救急医師等の医療従事者が派遣されており、非医療職派遣者を合わせると40人前後のスタッフが働いていました。

そこにバングラデシュ赤新月社の職員や日雇いの清掃員など、合計100人近いスタッフがキャンプ内のテントに宿泊していました。

一日の流れは、朝7時半の全体ミーティングに続き、医師によるミーティング、8時から

病棟回診、9時頃より手術開始、夜の8時にもう一度病棟回診です。

手術内容はほとんど小手術です。熱傷や膿瘍が多く、その洗浄と包帯交換が全身麻酔下で約3~4日おきに行われます。その他はすべて緊急手術となり、骨折の整復・交通外傷・急性腹症・帝王切開などがありました。

しかし、フィールドホスピタルの長期的継続を見据えて2019年よりその運営をバングラデシュ赤新月社に委譲することが決まっており、手術室は2018年12月をもって閉鎖の方向となっていたため、私の着任後手術件数は激減しており、一日平均3~5件程度でした。



キャンプ内要員宿泊用テント



テント手術室



朝のミーティング (クリスマス)



手術室スタッフ

## 日赤診療所

フィールドホスピタルの手術室閉鎖に伴い日赤の事業に合流し、保健要員として活動することになりました。

キャンプ内のテント生活から日赤要員が宿泊するコックスバザールの宿舎での生活となり、蚊に悩まされる日々からも解放されることとなりました。

私が入った時点で日赤からは医師の派遣は行っておらず、実際の診療はバングラデシュ赤新月社の医師、看護師、助産師によって行われており、私の仕事は「診療所の運営管理」という名の何でも屋です。

実際、過去の日赤要員の指導によりバングラデシュ赤新月社スタッフのみで診療事態は滞りなく行われていました。しかし薬剤師の派遣も数ヶ月前に終了しており、薬剤管理に関しては問題が頻発し、悩まされました。また 1 月より水痘の流行が起こり、その対応や調査も行いました。

普段の麻酔科医としての業務とあまりにも違う慣れない業務であり、期間も短く（12 月 30 日に総選挙があり、安全のため日赤に合流してから 1 月 4 日までキャンプ内での活動が禁止されていた）何かを成し遂げたというようなことは出来ませんでした。前任者の細かい申し送りと、一緒に活動した仲間たちの協力のおかげで、診療の質は維持されたように思います。



バングラデシュ赤新月社スタッフと勤務表の確認

現在日赤診療所の地盤補強工事と建物の改築工事が予定されています。

地盤工事の方は 1 月上旬から開始されており、改築工事は事務手続きが済み次第診療所の引越しを行いサテライトクリニックで診療を行う予定となっていました。バングラデシュというお国柄のせいか、手続きに難渋しているようで、私の在任中に引越しまでたどり着けませんでした。

私の帰国後に当院からも心強いスタッフが派遣されておりますので、彼ら/彼女らの活躍で事業が進んでゆくことを願います。



地盤補強工事



引越しに向けテント解体

## 総括

今回思いがけず日赤保健要員としてプライマリー・ヘルス・ケアに関わる機会を得て、学ぶことの多い、大変貴重な体験をさせていただきました。麻酔科医として急性期医療に携わる業務もやりがいのある任務ですが、実際に避難民の方々と接するという初めての経験を通して、彼らのレジリエンス（困難な状況からの回復力）を目の当たりにして感動を覚えました。同時に、未だ解決の糸口もつかめぬ避難民の生活にやり場のない怒りも感じます。月並みな言い方になりますが、避難民の皆さんが一日も早く安心して暮らせるように願ってやみません。

最後になりますが、派遣中にご支援いただきました日赤本社国際部の皆様、大阪赤十字病院国際医療救援部の皆様、多大なご迷惑をおかけした手術室の方々、何よりも私の不在のカバーをしてくださった麻酔科・集中治療部の皆様に深く感謝を申し上げたいと思います。